

# 非疑問<sup>1)</sup>の「“什么”+N」構文をめぐって

曹 泰 和

## 0. はじめに

「“什么”+N」構文について、呂(1985)では“什么福!”のタイトルで次ように論じられている。

“还有一类句子，本是一个判断句。因为感情强烈，往往连主语带是字都省去，直接用什么起头。无论有没有是字，这类句子的涵义都是‘不是’。”(149-150頁)

この「主語と“是”の両方が省略されている」との考えに基づいて、“什么福!”の文を復元すれば“这是什么福!”になり、表している意味は“这不是福。”となる。つまり、“什么学校! 这么破!”“什么老师! 一点不负责。”といった文は、基本的に“这是什么学校! 这么破!”“他是什么老师! 一点不负责”の省略であると言える。筆者も基本的にこの考えに同意する。

さらに、呂(1985)では、上の“什么福!”構文をめぐってもう一つ指摘している。

“这里有一个问题。判断句经过反诘而发生否定作用，该是否定那个表语，例如‘这是什么麻栗! 洋松罢了。’可是上面的例子(‘妈妈，你听哥哥说的是什么话!’)显然有些不同，比如‘说的是什么话’不能说他说的是不是‘话’，意思只是说这是不该说的或不中听的话。同样，其余的例句(‘这是什么日子!’)里被否定的也不是中性的‘日子’等等，而是含蓄在这些字里面的‘好’‘合宜’等性质。”

このように、“表語”そのものが否定されている場合とそうでない場合があると指摘し、そうではない場合において、否定されているのは「良い」「適宜」といった「含意」であると述べている。しかし、呂(1985)ではこれらの数例について記述しているだけであり、“什么话”“什么日子”以外の名詞の場合

も言えるかどうかについては言及していない。また、“什么福!”のような構文において、“什么”の後ろの名詞はどのような制約を受けるのか、言い換えれば、否定の意味を表す際、“什么”はどのような名詞と共起できて、どのような名詞と共起できないのかといった研究はまだなされていない。

本稿は、まず第1節で予備調査を通し仮説を立てる。それから、第2節で“是”“算”“叫”を視野に入れながら、(这+是/算/叫)「什么+N」構文における二つの否定について考察を行う。第3節では、「“什么”+N」構文の基本的な機能は「話題のN」に対する「格下げ」であることを論じる。第4節において、名詞に焦点を当て、どのような「特徴」を持つ名詞なら「“什么”+N」構文に入り、反語の意味を表せるのかを明らかにすると同時に仮説を検証する。最後の第5節において、「“什么”+N」構文における「N」の前では修飾語を受けにくい点を提示し、「“什么”+N」構文の特徴を違う角度から見る。

## 1. 予備的考察

劉月華・瀋文娛・故鞞(1994)では、名詞を一般名詞、抽象名詞、集合名詞、固有名詞と四つに分類している。予備的考察のため、この四種類の名詞をそれぞれ「“什么”+N」構文に入れた場合、反語の意味が表せるかどうかを見てみる。

一般N:

- 1) 这是什么字典! 连这么基本的词都没有.
- 2) 这是什么自行车! 这么容易就坏了.

抽象N:

- 3) 你这是什么态度! 该好好反省反省.
- 4) 个个都玩游戏机, 这是什么风气!

集合N:

- 5) \*这是什么人口!      6) \*这是什么人类!
- 7) \*这是什么人们!      8) 这是什么父母! 对孩子一点不负责.

专有 N:

9) ? 这是什么长江! 10) \*什么王平! 11) 什么雷锋!

12) 这是什么茅台酒呀! 一点也不好喝.

このように、“人口”“人类”“人们”といった集合名詞と“长江”“王平”といった固有名詞は「“什么” + N」構文に用いられない。これらの名詞の特徴を考えてみると、「標準」あるいは「理想」といった評価を下しにくい。その理由は“人口”“人类”“人们”“长江”“王平”といった名詞には「標準」や「理想」のようなものがあると考えにくいからであろう。（“\*标准的人类”“\*标准的人们”“?标准的长江”“?标准的王平”）

ここで、下記のような仮説を提示したい。

仮説：反語の意味を表す「“什么” + N」構文に用いられる「N」は「標準」の想定」ができる「N」でなければならない。さらに、「“什么” + N」構文の使用条件としては、話し手が想定した「標準の N」と発話の場で話題になっている「話題の N」との間にズレがある。

## 2. 反語の「“什么” + N」構文における二つの否定

### 2.1 話者による「帰属の否定」

「帰属の否定」とは、話者は発話の場で指し示している人、事、行為などがあるカテゴリーに帰属させることを拒否していることを指す。例えば、下記のような場合である。

13) 连办公室都没有, (他) 算什么领导. (=他不算领导)

14) 他叫什么企业家? 简直就是个倒爷! (=他不叫企业家)

15) 这又是什么难事? 你竟没有一点人心, 只是摇头! [莫言: 倒立]  
(=这不是难事)

16) 这是什么恋爱呀! 简直是物质引诱, 骗人上钩! [陆文夫: 清高]  
(=这(种行为)不是恋爱)

これらの例において、話者は発話の場で話題になっている“他”は“领导”

のカテゴリー、“这件事”は“难事”のカテゴリー、“这种行为”は“恋爱”のカテゴリーに属しないと認識している。意味としては括弧内の文の意味に当たる。このように、発話の場で指し示している「話題のN」と話者が想定した「標準のN」との間にズレがあるため、話者はその「話題のN」を「標準のN」のカテゴリーに入れたくないのである。よって、「帰属の否定」という語用論的な機能を果たしている。

「帰属の否定」がもっともはっきり現れているのは“算”を用いる「“什么”+ N」構文であろう。これは、当然“算”の語彙的意味から来ているのである。『現代漢語規範字典』（1998）では、“算”の意味項目の中で次のような例を挙げている。

計算进去： 明天劳动算上我一个。别把他算在内。

认作；当作： 老王算是一个好人。身体还算结实。

“算”は「…を…の中に入れる、あるいはとりあえず入れる」という意味があるので、これは反語文になると、「入れない」という意味になる。上の14) 15) 16) の例も“算”に置き換えられるという点を見ても、これらの例は「帰属の否定」を表しているという共通の特徴を持っていることが言える。

また、上記の13、14、16の例を“叫”に置き換えても差し支えない。ただし、「その名称に相応しくない」というニュアンスが付与される。

“是”については、趙元任『漢語口語語法』で次のように説明されている。  
“(1) “是”作为系词，表示主语等同于宾语，如“明天是端阳”。(2) “是”表示类属，如“他是回民”。”<sup>3)</sup>

これは反語の意味になると“不是…”“不属于…”である。“是”は“算”、“叫”と比べて、「XはYですか？XはYだったら、いったいなんの（どんな）Yなの」といった「再確認」のようなニュアンスがあると思われる。例えば、16) の例を見ると、「これが恋愛？これが恋愛って言えるのなら、いったいどういう恋愛なのよ。」というニュアンスが含まれている。

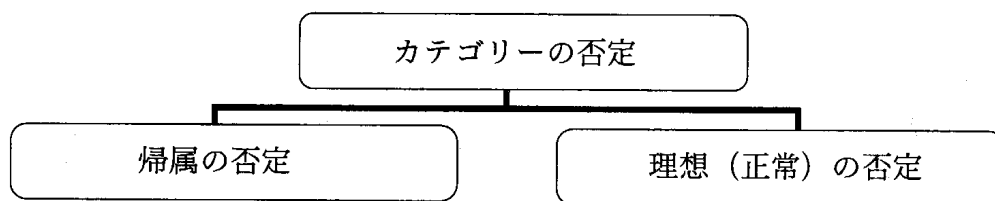
## 2.2 話者による「理想（正常）の否定」

「理想（正常）の否定」とは、話者が「N」そのものについて否定しているのではなく、「話題の N」は「良い N」つまり「理想の N」あるいは「正常の N」であることを否定していることを意味している。たとえば下記のような例の場合であり、表している意味は括弧内の意味に当たる。

- 17) 今天做的这是什么菜呀！这么难吃！（=不是好菜。）
- 18) 这是什么报啊！净胡说八道！（=不是好报。）
- 19) 你这人怎么这样，人家演出那么辛苦，好不容易凉了杯水，你还给喝了，什么人呀。（=不是好人。）〔王朔：浮出海面〕
- 20) 你是什么鼻子！连这么微妙的味都能闻出来。  
（=你不是一般的鼻子。）
- 21) 他是什么脑袋！居然比计算机都快！（=你不是一般的脑袋。）

### 2.3 「帰属の否定」と「理想（正常）の否定」の関連

すでに触れたが、「帰属の否定」について、話者は「話題の N」を「一般 N」のカテゴリーに入れたくない場合を指し、「理想（正常）の否定」について、話者は「話題の N」を「良い N」のカテゴリーに入れたくない場合を指す。したがって、「帰属の否定」と「理想（正常）の否定」は「カテゴリーの否定」の下位分類として考えられる。



また、「“什么” + N」構文を用いて、「帰属の否定」をするのか、「理想（正常）の否定」をするのかは、「N」の属性がどれほど固定しているかによる。つまり、属性が固定し、話者の主観によって否定できるものでなければ、「帰属の否定」ができないことになり、「理想（正常）の否定」の方が捉えられる。

例えば、職業名についてはすでに客観的に存在しているので、その存在を主

観的に否定するのが難しいと思われる。したがって、「理想（正常）の否定」の方に傾く。例えば、“他是什么领导，对部下一点不关心。”と言っている場合、彼の肩書きが客観的なものとして存在しており、否定するのが難しい。しかし、彼は「良い指導者」ではないということは容易に言える。もう一つ例を挙げると、“她是什么女人！这么爱动武。”（何っていう女だ！すぐ暴力をふるうなんて。）この例からも分かるように、性別については、当然否定できないため、「良い女」ではないという「理想（正常）の否定」の方が自然な読みになる。つまり、「N」の属性がすでに固定している場合は「帰属の否定」が制約され、「理想（正常）の否定」の意味が際立ってくる。

しかし、“算”を用いれば、「N」の属性が固定していても「帰属の否定」を表すことができる。なぜならば、“算”の語彙的意味には、「臨時的」「暫時的」という意味的特徴があるからである。「本来ならそうではないかもしれないが、臨時的なら可能」ということであろう。つまり、彼は“领导”であることが事実であれば、“他不是领导”は言えないが、“他不算领导”なら言える。逆に、彼は“领导”ではない場合でも、“就算他是领导”が言える。

また、“是”については「帰属の否定」のときもあれば、「理想（正常）の否定」のときもある。さらに場合によって、一つの文の中で両方の意味を含むこともある。

22) 这是什么咖喱饭呀！怎么还放了葱呢！

23) 这是什么咖喱饭呀！一点不好吃。

24) 这是什么咖喱饭呀！我从来没吃过这种味道的咖喱饭。

22) の例は、普通はカレーに葱を入れない。葱を入れているカレーはもうカレーではないという意味を持つ発話。23) の例は、カレーとして認めるものの、おいしいカレーではないという意味の発話。24) の例は、カレーとは言えないという意味と、おいしいカレーではないという両方の意味が含まれる発話だと考えられる。つまり、22) の例は「帰属の否定」に傾き、23) の例は「理想（正常）の否定」に傾き、24) の例は「帰属・理想（正常）の否定」と両方が含まれている。「帰属の否定」を行う前提は、話者の認識における「一般 N

の標準」と「話題の N」との間にズレが生じているときであり、「理想（正常）の否定」を行う前提は、話者の認識における「良い N の標準」と「話題の N」との間にズレが生じているときである。「帰属・理想（正常）の否定」の両方が含まれている場合は、話者は「話題の N」は「一般 N の標準」にも達していなければ、「良い N の標準」にも達していないと認識しているときである。（例えば、“他什么领导！我才不听他的呢。”）

### 3. 「“什么” + N」構文が持つ「話題の N」に対する「格下げ」の機能

筆者が収集した多くの例文から、非疑問の「“什么” + N」構文における「N」の使用状況をみると、「N」はプラスの意味でもマイナスの意味でもない中性意の名詞である場合がもっとも多いが、プラス意の名詞もある。しかし、マイナス意の「N」が来て、この「N」を否定する例は見当たらなかった。まず、例<sup>4)</sup>を見てみよう。

25) 什么科长？饭桶。 26) 什么电视剧？瞎侃。 27) 什么企业家？倒爷。

28) “哇！这是什么对联嘛？上有天上有星有明月，谁说的？万一阴天呢？而且，抬头是屋顶，看不到星生明月的，这不太不写实了！至于那个万斛是什么意思？”[琼瑶：还珠格格]

29) 那就是受外国人尊敬的高等华人 什么高等！[叶圣陶：倪焕之]

30) “你又是什么好人？趁早不用在我面前假撇清！”

このように、“科长”“电视剧”“企业家”といったプラスの意味でもマイナスの意味でもない中性意の名詞や“高等”“好人”といったプラスの意味の名詞が「“什么” + N」構文によく用いられる。文全体の意味として「N」を否定することになり、通常反語文となる。しかし、マイナスの意味を持つ「N」が来ると、面白いことに「N」を否定する意味がなくなり、「N」を肯定する意味になってしまい、通常反語文と異なる振る舞いをする。例えば、

31) 什么狗屁文章，群舞整齐，表演认真，理解人物深刻。马屁都拍到马腿上去了。[王朔谐趣文集]

32) “什么乱七八糟的。”丁小鲁看见杨重,笑着说…[王朔. 一点正经没有]  
なぜ、マイナスの意味を持つ名詞あるいは名詞句が続くと、文はその名詞あるいは名詞句を否定する意味にはならず、肯定する意味になるのか。これはおそらく非疑問の「“什么” + N」構文全体が否定の意味を持つことに理由があるのではないかと思われる。“什么”の後ろに中性意の名詞が来ても、プラス意の名詞が来ても、マイナス意の名詞が来ても、結局、文の意味として否定の意味になるという点から見ると、「“什么” + N」構文が持つ否定の意味がかなり固定していると言えよう。機能的な観点から言えば、「“什么” + N」構文の基本的な機能は、発話の場で指し示している「話題の N」を「格下げ」することであり、「話題の N」を「格上げ」することではないということであろう。下記例は筆者の作例であるが、引用文なら言えるが、第一の発話としては使えないであろう。

33) 什么 ‘丑八怪’！一点不丑。

34) 什么 ‘垃圾’！这不是还能用吗？

35) 这是什么 ‘破烂’！一点不破。

つまり、中性的なもの、プラスの意味のものを否定するのは「“什么” + N」構文の典型的な用法であり、典型的な機能でもある。マイナスの意味を持つ「N」を否定するのは「“什么” + N」構文の基本的な機能に反している。

#### 4. 「“什么” + N」構文における「N」について

第1節では反語文の「“什么” + N」構文に用いられる「N」は「標準の想定」ができる「N」でなければならない。」と仮説として提示した。この節では、どのような名詞が「標準の想定」がしやすく、どのような名詞が想定しにくいかについて、一般名詞、抽象名詞、集合名詞と固有名詞、さらに人を表す名詞というように、それぞれ名詞の種類に基づき考察し、仮説を検証する。

##### 4.1. 「標準の想定」ができる「N」の場合



① 物の類を表す名詞—“称物名詞”

本稿は、『八百詞・付録』（呂叔湘 1980）の 400 個あまりの名詞について考察を行った。考察の内容は、どのような名詞が「“什么” + N」構文に入ると反語文の意味となり、どのような名詞が反語文の意味とならないのかである。考察の結果、物の類を表す“称物名詞”なら反語文となることが可能であると分かった。例えば、“板、报、纸、碑、被单、笔、鞭炮、扁担、标语、表、饼干、玻璃、布、布告、菜、苍蝇草、手、床、书架、字典、自行车、”のような名詞である。これらの名詞は当該物のカテゴリーを表し、そのカテゴリーに属する個々のメンバーはもしそのカテゴリーの性質や特徴つまり「標準のタイプ」にふさわしくない面があれば、話者はそれについて評価を行うことができる。つまり「帰属の否定」もできれば、「理想（正常）の否定」もできる。

36) 这叫什么字典呀！我看只能称它是个小册子而已。

37) 这是什么自行车呀！才用了几次呀就坏了。

38) 这叫什么饼干呀！这么难吃。

② 概念を表す抽象名詞や人の行為、思想、属性を表す抽象名詞

抽象名詞については、“理想、麻烦、兴趣、苦恼、偏见、成见、主张、结论”などのような抽象的な概念を表す名詞、また“作风、态度、决定、主意、念头、立场、观念、精神、性格、习惯、习性、毛病、风气、胆子”のような人の行為、思想、属性などを表す名詞は「“什么” + N」構文に用い、反語の意味を表すことができる。次のような例が挙げられる。

39) A: 我的理想是不吃红萝卜。B: 这叫什么理想！

40) A: 那就给您添麻烦了。B: 这叫什么麻烦呀！这么点儿小事。

41) 你这是什么态度！该好好反省反省。

42) 你这是什么决定！一点也不符合实际。

43) 你这是什么主意呀！

このように、ある抽象的な概念に対し、話者の認識として「正しいもの」つまり「標準」のようなものが存在すれば、相手が認識している概念に対する否定または訂正ができる。また、人の行為、思想、属性などについて、話者の認

識として「標準のタイプ」つまり「正しいもの」が存在しているのならば、相手のことを否定することができる。

③ “校长”“售货员”のような人の肩書きや職業名を表す名詞、また“女人”“孩子”のような人を表す総称名詞であれば「標準の想定」ができる。ただし“女人们”“孩子们”のような複数を除く。もう少し例を挙げると、“售货员、理发员、运动员、列车员、船长、队长、校长、博士、战士、女士、导师、医师、工程师、讲师、药剂师、厨师、党员、干部、读者、作者、记者、编者、文艺工作者、爱国主义者、女人、孩子”などのような名詞である。これらの名詞は「“什么”+N」構文において「帰属の否定」は難しく、「理想（正常）の否定」を表している。

44) 他是什么党员！

45) 他是什么高级工程师！连这么基本的问题都解决不了。

46) 什么女人！在光天化日之下这么大打出手。

47) 什么孩子！一点也不听话。

48) 什么阿姨！对小朋友一点不负责。

#### 4.2. 「標準の想定」がしにくい「N」の場合

① 自然現象や生理現象を表す名詞に対しては、「標準の想定」がしにくいことが多い。例えば、“冰、冰雹、光、雨、台风、寒流、冰、雷、露水、气、云、云层、狂啸、暴风雪、暴风雨、鼻涕、眼泪”といった名詞。

49) ?这是什么鼻涕！

50) ?这是什么冰雹！

51) ?这是什么云！这么黑。

49) の例を考えると、医者でもなければ、普通の人はどうな鼻水が「標準の鼻水」なのかについてあまり考えないのが一般的であろう。自然現象の名詞も同じであるが、われわれはそれを自然の現象として受け止めることが多く、その自然現象について専門的に研究している人でなければ、「標準の自然現象」であるかどうかを想定しないのが普通であろう。

しかし、すべての自然現象が、「標準」を想定しないということではない。また想定しやすいかどうかは、その自然現象がわれわれにとって身近なものであるかどうかにも関連がある。つまり、身近な存在であれば、「経験」が豊かで、異質的な場面に遭遇したときに、いつもの経験から「標準の想定」をすることができる。例えば、“雪”と“冰雹”を比べると、雪の方がわれわれにとっては馴染みがある。また“雪”は地理的な場所によって人々に与えるイメージが違ふことが考えられる。話者の持つ“雪”のイメージと現実の“雪”のイメージとがズレを生じる際に、反語の意味を成立させる条件を満たす。例えば、下記の52)の例である。

52) 这叫什么雪呀！还没到地下就化了。

「経験」の少ない例として、もう一つあげる。

53) 这是什么光？这么刺眼。

53)の例は疑問文としての読みが自然である。その理由は、“光”については科学者あるいはいつも“光”を利用している俳優のような人でなければ、われわれは普段“光”の「標準タイプ」についてあまり考えない。

このように、「標準の想定」ができるかどうかまたはするかどうかについては、個人個人の経験や知識なども係わってくると思われる。

② 心理的活動を表す名詞は「標準の想定」ができない。

“心思”“盼头”“信心”等のような心理的活動を表す名詞には、「標準のタイプ」が存在しないように思われる。

54) \* 这叫什么心思！ \* 这是什么破心思！

③ 具体的な音や声を表す名詞については「標準のタイプ」が考えにくいので想定も難しい。

“掌声、笑语、咳嗽声、歌声、说话声、脚步声、争吵声、辩论声”といった名詞については、属性が固定している面もあれば、個性的な面もある。それについて、どれが好いか、どれが悪いか、というレベルで問題とされないのが普通である。例えば、「こういう「咳声」だったら「標準な咳声」だ。」というようなことが言いにくい。ただし、「標準」のようなものがもしあれば、文の容

認度が高まる。例えば、次のような「拍手を練習する」場面なら言える。

55) 这什么掌声? 一点不齐, 掌声要拍齐, 再好好练练。

④ “专有名词” “集合名词” では「標準の想定」をするのは制約がある。

例えば“中国、黄海、北京、西湖、长城、王朔、长春”のような“专有名词”、“人类、人口、书本、车辆、瓷器、物资、父母、子女、军火”のような“集合名词”は「“什么” + N」構文を用いられない場合がある。例えば次のような場合である。

56) ?这是什么长春! 57) ?什么曹泰和!

58) \*这是什么人类! 59) \*这是什么人们!

“专有名词”の場合、ほとんどのメンバーが「単一性」という特徴があるため、「標準」であるかどうかの問題そのものの言及ができなくなってしまう。

“不能加个体量词”（朱德熙 1982）の“集合名词”は、物の類を表す“称物名词”あるいは人の総称を表す“称人名词”より大きな集合体となっている。

“集合名词”は「一つのまとまり」として捉えられる場合が多い。その場合“专有名词”の性質に似て「標準」を想定する土台がない。例えば“人”と“人类”の違いを見ると、“人”については個々人の差があるが、“人类”になると、より大きなカテゴリーになり、比較する場合は“鸟类”“爬行类”といった異なるカテゴリーから見ることになる。

しかし、“专有名词”にも“集合名词”にも「標準の想定」ができる場合がある。例えば、次のような例の場合である。

60) 这是什么茅台酒呀! 一点也不好喝。

61) 什么新宿! 一点不繁华。

62) 这是什么父母! 对孩子一点也不负责。

なぜ、“茅台酒”“新宿”のような“专有名词”なら容認できるのかを考えると、これは、これらの名詞は本来の意味以外に、ある「象徴的な意味」が付与されているからだと思われる。つまり、「おいしいお酒」「繁華街」といった追加の意味が含まれている。この「象徴的な意味」が付加されることによって、その名詞における「標準の想定」ができるようになり、反語の意味を成立

させる条件となる。例 60) 61) の“一点也不好喝”“一点不繁华”の発話を見れば分かるが、否定されているのは「象徴的な意味」である。

また、“专有名词”については、現在は「象徴的な意味」がなくても、いつか「象徴的な意味」が付与されるようになれば、「“什么” + N」構文に入り、反語の意味を表すことができるようになる。例えば、“王平”という人物が現在無名で、名前以上の付加的な意味を持たない場合、“?什么王平!”の容認度は低い。しかし、“王平”の名が皆に知られるようになって、ある「象徴的な意味」を持つようになると、“什么王平!”は自然な発話となる。

“集合名词”は、個々の集合体の性質が均一でない場合、すなわち「非均一性」の場合に、「標準」を想定する条件が満たされる。例えば、62) 例の場合。つまり、「N」の性質が「非均一性」である場合に「標準」を想定できる。

## 5. 「N」の修飾成分について

反語の意味を表す「“什么” + N」構文における「N」の定語については、例文の観察や日中比較の視点から見て、制限を受けることが分かる。例えば、指示代詞の修飾を受けることができない。

63) 什么态度! 该好好端正一下. 63') \*什么这个态度! 该好好端正一下.

64) 什么脾气? 动不动就生气. 64') \*什么这个脾气? 动不动就生气.

しかし、日本語なら「何、その態度!」「何、その性格」と言える<sup>5)</sup>。日中の比較については別稿に譲りたいが、ここでは、中国語はなぜ指示代詞の修飾を受けることができないのかを考えてみる。これまで述べてきたように、反語の意味を表す「“什么” + N」構文の基本的な用法は「帰属の否定」と「理想(正常)の否定」である。「帰属の否定」は「一般のN」のカテゴリーに入れることを拒否することであり、「理想の否定」は「良いN」のカテゴリーに入れることを拒否している。大きな次元から言えば、両方とも「カテゴリーの帰属」を拒否している。Burton-Roberts (1976) によれば、“语言的实体不可能同时具有指称和归属作用。”と指摘されている。(張敏 1998 参照) “\*什么这

个态度！”が非文である理由は、このように、指示と帰属は同時に作用できないというルールが働いているからだと思われる。

「N」の定語には制限があるが、“的”のない“粘合式”なら「N」の前に置くことができる。

65) 你这是什么开车技术！太吓人了。

66) 这是什么玻璃窗子！这么不结实。

67) 这是什么主治医师！一点儿不负责。

“开车”“玻璃”“主治”のような修飾成分は後ろの名詞と密接な関係があり、すでに一つの名詞として見なすことができる。朱德熙(1982)『語法講義』では“粘合式偏正结构的功能相当于一个单个的名词, 凡是单个的名词能出现的地方, 它也能出现。”と指摘されている。

## 6. まとめ

本稿は、反語の意味を表す「“什么”+N」構文において、「帰属の否定」「理想(正常)の否定」という二つの否定があり、この二つの否定は「カテゴリーの否定」の下位分類として見なせることを論じた。

また、非疑問の「“什么”+N」構文はマイナスの意味を持ち、機能的な観点から言えば、「“什么”+N」構文の基本的な機能は発話の場で話題になっている「話題のN」を「格下げ」することである。

さらに、名詞の観察を通して、物の類を表す名詞；抽象的な概念、人の行為、思想、属性などを表す名詞；人の肩書き、職業などを表す名詞の場合は「標準の想定」がしやすく、自然現象や生理現象を表す名詞；心理的活動を表す名詞；具体的な音や声を表す名詞；集合名詞；固有名詞には「標準の想定」がしにくいことが分かった。これらの「標準の想定」がしにくい「N」は反語文の「“什么”+N」構文を用いにくいことが分かり、仮説を検証することができた。

注

- 1) “什么乱七八糟的。”のような文も考察の視野に入れているため、「反語文」より広い範囲を表している「非疑問」にした。しかし、本論の中心は「反語文」である。
- 2) 「標準」とは一定の基準があるものを指す。
- 3) (『漢語語法分析問題』 吕叔湘 2000 から引用)
- 4) 例 25) 26) 27) は『学漢語』1995 年第 5 期による
- 5) 「何、その態度」のような文は「反語文」として扱われていないが、意味的に中国語と類似しているため対照できると考えている。

〈参考文献〉

- 吕叔湘 (1957) 《中国文法要略》商务印书馆出版
- 吕叔湘 (1985) 《近代汉语指代词》吕叔湘 著 江蓝生 补 学林出版社出版
- 吕叔湘 (2000) 《『汉语语法分析问题』助读》语文出版社
- 劉月華・瀋文娛・肝犇 (1994) 『現代中国語文法総覧』(上) 相原 茂 監訳  
くろしお出版
- 朱德熙 (1982) 《语法讲义》商务印书馆
- 张敏 (1998) 《认知语言学与汉语名词短语》中国社会科学出版社
- 古川裕 (1989) 〈“的s” 字结构及其所能修饰的名词〉《语言教学与研究》第 1 期  
北京语言文化大学出版社
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版

(そう たいわ・お茶の水女子大学大学院博士後期課程)